

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校教諭)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

新しい学校様式における 給食風景

コロナ禍2年目の学校。

かつての生活様式に戻る気配はまだありません。密接・密閉・密集の「三密」を避けることが定着しています。

マスクを日常的に身に着け、登校後に石鹸で手を洗います。図書室など多数の児童が使用する場所から戻ってきた時もうそっしします。

業間休み以外の休み時間は自席で過ごします。今年度からGIGAスクール構想でタブレット端末が一人一台配付されたので、休み時間はそれを使っています。おかげで、児童は自席で過ごすことが苦にならないようです。

とはいえ、自席で過ごすというのは一人の時間を過ごすということです。友だちと触れ合う機会を失うこととなります。

これ以外にも新しい学校様式が求められます。今回は、給食についての変化をテーマにしました。

1 給食時の机の向き

コロナ禍以前、給食の時間は班になって和気藹々わいきあいと楽しみながら食事をしていました。

しかし、コロナ禍では飛沫を避けるために会話が禁止です。班にすることができません。

Q1 机の向きはどのようにしていますか。

- ① 授業と同じように黒板の方を向く
- ② 窓の方を向く
- ③ 廊下の方を向く

「コロナ禍なので班にできません」と教師が言え、子どもたちは異を唱えません。黒板の方

を向くことに違和感はありませんから、①でも納得します。

ただし、机の向きが授業と同じなので代わり映えがせず、新鮮さがありません。

環境の変化は人の期待値を高めます。例えば③のように廊下の方を向けると気分は変わります。しかし、廊下側には壁があり、圧迫感があります。

お勧めは②です。景色が見えるだけですが、これが心を和ませてください。かつて同じような経験をしたことがあります。

私は一人でランチをするためにお店に入りました。案内された席は窓際です。食事が届くまで読書をして過ごします。食事が届くと読書を止め、箸を動かします。黙々と食事をするのですが、一人の食事は孤食となり、空しさを感じます。

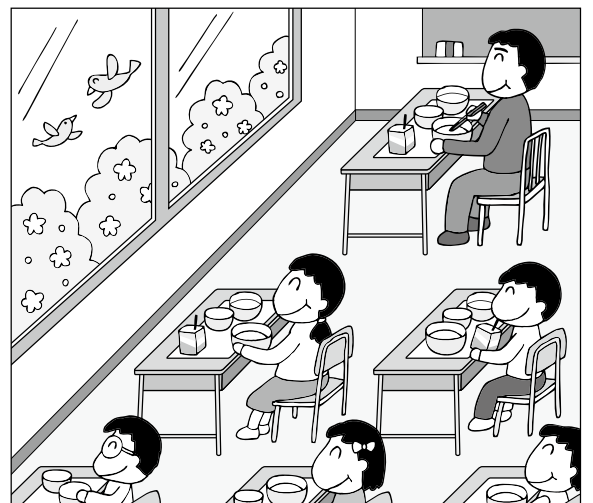
ふと目を上げると、窓越しに行き交う人々が見えます。颯爽さつさうと歩く姿には仕事を頑張っているという矜持こんじを感じます。「お仕事ご苦労さま」と応援したくなります。

目を転じると、信号待ちをしながら立ち話をしている二人組が目に入ります。笑顔を交わしながら楽しそうに会話をしています。「仲が良いですね」と幸せな気分させてもらえます。

乗用車が停車しています。私と同じ車種です。仲間意識を感じます。

窓から見える景色は動いています。変化があります。一様ではありません。それが楽しいのです。もし、カウンターや窓のない店の奥に案内されたら、そんな体験をすることはなかったでしょう。

学校生活の中で景色を見るという機会は、新鮮味があります。私は、孤食を忘れさせてくれ



た時間を思い出し、「机を窓の方に向けて」と子どもたちに言いました。

子どもたちには私の意図がわかりません。ただ、「何か良いことをしてくれるのかな」という期待を感じます。給食は窓の方を見て食べるという、新しい学校様式の始まりです。

窓の方を見て食事をするという新しい学校様式は、授業のような緊張を強いられずじまいます。戸外を見渡せ、視界が広がります。すると、心も解放されます。

給食を食べ終わった子どもから机を元に戻して、片付けをします。

食べ終わったからといって会話をするわけにはいかなないので、宿題や読書、タブレット端末を使用する時間とします。

窓を向いている子どもはそれを見て、「食べる時間はまだあるかな」と時計を見ます。改めて食べることに集中します。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

2 配膳の待ち方

前述の通り、コロナ禍では机を寄せて班を作ることができません。

従って、給食を机上に配る当番が歩くスペースが狭くなります。

Q2

配膳を待っている子どもにも対応し
てもらいたいになります。どのよ
うに待ってもらいますか。

- ① 椅子に座って待つ
- ② 椅子をしまい、立って待つ
- ③ 廊下に出て待つ

①は一般的です。しかし、これでは椅子の部分が通路を占領し、より狭くなります。

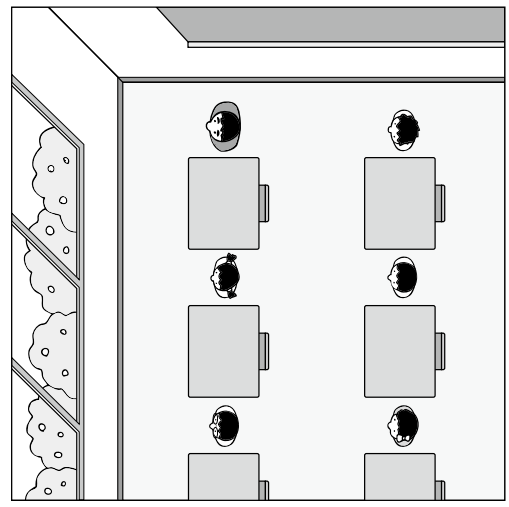
③のように全員が廊下に出ると、広さは確保できます。

しかし、待っている子どもは黙って静かにしているわけではありません。お喋りが始まります。飛沫が飛びます。密にもなります。

私は②のように立って待たせています。椅子がある箇所に立つのが一般的ですが、これだと椅子に座ったときと同じく、スペースは狭いままです。

そこで、次の図のように机の左右に立ちます。給食当番はそこを通らないので、椅子の分だけのスペースを確保できます。

さらに、机の横の長さだけ距離を取れるので、座るよりもソーシャルディスタンスを確保できることになりました。まさに、一石二鳥です。



3 着席のタイミング

給食を待っている時は立っていますが、食べる時は座らなければなりません。

Q3

どのタイミングで座りますか。
①自分の分の給食が机上に揃った時
②全員の分の給食が机上に揃った時

「いただきます」は全員で言います。「全員」をキーワードとするなら、②が普通でしょう。

しかし、私は①のように、座る判断は個人に任せています。とはいえ、子どもはその日の給食のメニューを把握しているわけではありません。

そこで、給食係が給食のサンプルを確認して、皿の枚数を黒板に書きます。
板書→皿2+フルーツ+牛乳

給食を待っている子どもは、板書してある食器の枚数と机上の給食が合っているかどうかを確認し、揃っていれば着席します。

着席にはもう一つの利点があります。それは給食当番が配膳状況を確認できることです。起立しているということは、配っていない、配り忘れていたということになります。

「黒板を見て、配膳されたら着席」という方式を採用してからは、確認のために声を出したり、歩き回ったりする必要がなくなりました。

給食当番が友達に給食を運びますが、それも工夫をしました。

適当に配ると、着席がまばらになり、確認がしづらくなります。そこで、配膳台から奥の座席から順に配ります。

駐車場でもそうですが、手前ではなく奥から駐車することで、空き具合がわかります。給食も同じです。誰に配膳し、誰に配膳していないかが一目瞭然となります。

給食当番は立っている人だけに注目すればいいので、速やかに把握ができます。

給食当番の座席には代わりの友達に立ってもらうことにしているので、配り忘れはなくなります。

* * * * *
コロナ禍では制約が多くなります。これまで良かったとほやきたくなくなります。新しい生活様式が試練となります。

それでも日常はやってきます。それなら、コロナ禍でもできることを考えた方が前向きになります。窓を向いて食事をするのは、コロナ禍だからこその様式です。

できないことを嘆くよりも、できることを見出すことがコロナ禍での対応となります。